

I型ファクターの無限テンソル積の  
ファクター型について

阪大基礎工 竹之内 脩

$H_v$  ( $v=1, 2, \dots$ ) : ヒルベルト空間.

$e_v$  は  $H_v$  の固定された単位ベクトル.

$H = \prod_v \otimes (H_v, e_v)$  :  $\prod_v \otimes e_v$  を含む無限テンソル積 (von

Neumann の不完全無限直積).

$M_v$  は  $H_v$  上に与えられた I型ファクター.

$T \in M_v$  の  $H$  上への拡大を  $\bar{T}$ ,  $\bar{M}_v = \{\bar{T}; T \in M_v\}$ ,

$M = \{\bar{M}_v; v=1, 2, \dots\}$  から生成された  $H$  上の von Neumann 環.

この  $M$  が  $\mathbb{C}$  である無限テンソル積である.

さて, 各  $H_v$  は  $M_v$  に属して,  $H_v = H_{v1} \otimes H_{v2}$  とテンソル

積に分解され,  $M_v = B(H_{v1}) \otimes I_{v2}$ .

$e_v$  はこの分解に対応して,

$$(1) \quad e_v = \sum_{j=1}^{m_v} \lambda_{vj}^{1/2} \psi_{vj} \otimes \phi_{vj}$$

と表わされる.  $\mathbb{C}$  である,

$$(2) \quad \begin{cases} \lambda_{vj} > 0 \text{ (すべての } j \text{ について)}, \\ \lambda_{v1} \geq \lambda_{v2} \geq \dots, \quad \sum_{j=1}^{m_v} \lambda_{vj} = 1. \\ \{\psi_{vj}; j=1, 2, \dots\}, \{\phi_{vj}; j=1, 2, \dots\} \text{ はそれぞれ } H_{v1}, \end{cases}$$

$\setminus H_{v_2}$  の NOS

とある。(indices は,  $m_v < \infty$  ならば,  $j=1, \dots, m_v$ ;  $m_v = \infty$  ならば,  $j=1, 2, \dots$  [重なりをもつてよい].) (1) の  $f_j$  は長方形ばかりであるからあるところがあるが, 集合  $\{\lambda_{v_1}, \lambda_{v_2}, \dots\}$  は, 各要素の重複度も含めて一意的に定まる。

$\Sigma = \Sigma'$ ,  $\Sigma''$  の  $\lambda_{v_1}, \lambda_{v_2}, \dots$  の性質を用いて,  $M$  のタイプ分類するに必要となる問題とある。その答として,

定理

$$M \text{ の I 型} \iff (3) \sum_v (1 - \lambda_{v_1}) < \infty.$$

$M$  の II 型  $\iff \forall v \exists n_v < \infty$ , 無限に多くなる  $n_v > 1$ . かつ,

$$(4) \sum_{v,j} \left( \left( \frac{1}{n_v} \right)^{1/2} - \lambda_{v_j}^{1/2} \right)^2 < \infty.$$

$\iff$  かつ,  $n_v = \dim H_{v_1}$ . また,  $\lambda > m_v$  のとき,  $\lambda_{v_j} = 0$  とする。

$$M \text{ の III 型} \iff (5) \sum_{v,j,k} \lambda_{v_j} \lambda_{v_k} \min \left\{ \left| \frac{\lambda_{v_j}}{\lambda_{v_k}} - 1 \right|^2, c \right\} = \infty$$

ある  $c > 0$ , かつ  $\forall v \exists n_v > 1$  の  $c > 0$  により,

von Neumann [7] は  $\dim H_{v_1} = \dim H_{v_2} = 2$  ( $v=1, 2, \dots$ ) のとき,

$\lambda_{v_1} = 1$  ならば,  $M$  は I 型,

$\lambda_{v_1} = \lambda_{v_2} = 1/2$  ならば,  $M$  は II 型

を示した。

Pukánsky [6] は  $\dim H_{v_1} = \dim H_{v_2} = 2$  ( $v=1, 2, \dots$ ) のとき,

$\lambda_{v_1} = p, \lambda_{v_2} = q$  ( $p, q > 0, p+q=1, p \neq q$ ) ならば,

$M$  は III 型

を示した。

Anaki [1], Bures [3] は上記 I 型のための必要十分条件を与えた。

Bures [3] は、

$n_1, n_2, \dots$  が有理数のとき、II 型のための必要十分条件、 $\lambda_{v_1}$  が下に有理、 $\lambda_{v_1}/\lambda_{v_2}$  が下に有理 (正の数で下から升之とされる) のとき、M は III 型。

を示した。

Moore [5] は、上記 II 型のための必要十分条件、および、

$\lambda_{v_1}$  が下から正の数であるとき、III 型のための必要十分条件

を与えた。

記号. 以下,  $\sum_{\nu}, \prod_{\nu}$  は  $\nu=1, 2, \dots$  に対応する和および積を,  $\sum_j, \sum_k$  は,  $j, k=1, \dots, m_{\nu}$  ( $m_{\nu} < \infty$  のとき), または,  $j, k=1, 2, \dots$  ( $m_{\nu} = \infty$  のとき) に対応する和を表わす. また,  $I(\nu) = \{1, \dots, m_{\nu}\}$  ( $m_{\nu} < \infty$  のとき), または  $= \{1, 2, \dots\}$  ( $m_{\nu} = \infty$  のとき).

### §1. 一般的準備

Lemma 1. いま,  $\dim H_{v_1} = \dim H_{v_2} = n_{\nu} = m_{\nu}$  とする. 是のとき, M は, 次のようは測度空間  $(\Omega, \mu)$  と, その上の

可測変換群  $G$  を用いて, von Neumann [8] に  $\mathcal{J}, \mathcal{Z}$  を構成する  
 の  $\mathcal{F}_\mu$  フォクター空間同型である。(以下,  $m_\nu < \infty$  とし  $\mathcal{Z}$  を書く.

$m_\nu = \infty$  の場合は容易に書き直すことができる.)

$$\Omega_\nu = \{\omega_{\nu j} ; j=1, \dots, m_\nu\}, \quad \mu_\nu(\{\omega_{\nu j}\}) = \lambda_{\nu j}.$$

$$G_\nu = \{g_{\nu 0}, g_{\nu 1}, \dots, g_{\nu m_\nu-1}\} \quad \omega_{\nu j} g_{\nu k} = \omega_{\nu(j+k)} \quad (j+k \text{ は } \text{mod } m_\nu \text{ と考えらる.})$$

$$\Omega = \prod_\nu \Omega_\nu, \quad \mu = \prod_\nu \mu_\nu, \quad G = \prod_\nu G_\nu \quad (\text{制限直積})$$

$G$  は, 各成分の上に対す  $G_\nu$  の作用に  $\mathcal{J}, \mathcal{Z}$ , 自然に  $\Omega$   
 上へ変換群と考へる.

(Bures [3], Lemma 5.2, Prop. 5.1)

Lemma 2.

$$H_{\nu i}^\circ = \overline{\mathcal{D}} \{ \psi_{\nu ij} ; j \in I(\nu) \}, \quad E_{\nu i} = \text{proj}(H_{\nu i}^\circ \otimes H_{\nu 2}) \text{ in } H_\nu.$$

とす。  $E_{\nu i} \in M_\nu$ .

$$\bar{E}_{\nu i} = E_{\nu i} \text{ の } H \text{ 上への拡張}, \quad E = \prod_\nu \bar{E}_{\nu i} \quad \text{とす.}$$

$E \in M$ ,  $EH = \prod_\nu \otimes (H_{\nu i}^\circ, e_\nu)$ ,  $(M)_E = (M)_{E_{\nu i}}$  の無限直積.

いま,  $(M)_E$  の  $\mathcal{F}_\mu$  フォクター型が知られるとす。  $(M)_E$  は  
 Lemma 1 に  $\mathcal{J}, \mathcal{Z}$ , 測度空間から作られる  $\mathcal{F}_\mu$  フォクター空間同型  
 であるから, その型は比較的に決定しやす。(.)

$(M)_E$  が I 型, II 型, III 型 ならば従って,  $M$  は, I, II, III 型.

$(M)_E$  が有限型かつ  $\sigma$ - $\sigma$ - $\sigma$  であるとき,  $M$  がまた有限型であるための条件は,  $\forall v \in A, n_v < \infty$ , かつ  $\sum_v (1 - \frac{m_v}{n_v}) < \infty$

証明. 最後の  $< \infty$  だけ証明すればよい. いずれかの  $n_v = \infty$  ならば,  $M$  が無限型は明らか. 以下  $n_v < \infty$  とする.

$\sum_v (1 - \frac{m_v}{n_v}) = \infty$  ならば,  $\prod_v \frac{n_v}{m_v} = \infty$ .  $\varepsilon = \varepsilon, A_1, A_2, \dots \subset \{1, 2, \dots\}$  と, 互いに共通部分  $\varepsilon$  を含む有限集合で,  $\prod_{v \in A_k} \frac{n_v}{m_v} > 2$  ( $k=1, 2, \dots$ ) ならば,  $\prod_{v \in A_k} \otimes H_{v_i}$  は  $F_k \in \prod_{v \in A_k} \otimes M_v$ ,  $\dim \mathcal{R}(F_k) = \prod_{v \in A_k} m_v$ ,  $F_k \prod_{v \in A_k} E_{v_i} = 0$  ならば射影作用素  $F_k$  を含む.  $\bar{G}_k = \bar{F}_k \prod_{v \in A_k} \bar{E}_{v_i}$  とすれば,  $E, \bar{G}_1, \bar{G}_2$  は互いに直交する  $M$  の射影作用素で, 互いに同等. 故に,  $M$  は無限型.

$\sum_v (1 - \frac{m_v}{n_v}) < \infty$  のとき,  $M$  は  $\sigma$ - $\sigma$ - $\sigma$  半有限.  $(M)_E$  が有限型であるから,  $E$  は有限.  $M$  の次元関数  $d$  は,  $d(E) =$

$\prod_v \frac{m_v}{n_v}$  として定め,  $\varepsilon = \varepsilon$  と,  $I = \sum_{(E_v)} E_{(E_v)}$  と表わされ.

ここで,  $(E_v)$  は  $0 < \text{有限個の } 1 \text{ を含む } \sigma$ - $\sigma$ - $\sigma$  列で,

$E_{(E_v)} = \prod_v \otimes \bar{E}_{v_i}^{(E_v)}$ ,  $E_{v_i}^{(0)} = E_{v_i}$ ,  $E_{v_i}^{(1)} = I_{v_i} - E_{v_i}$  とする.  $E_{(E_v)}$  は

$\sigma$ - $\sigma$  有限で,  $d(E_{(E_v)}) = d(E) \prod_{v=1}^{\infty} \left(\frac{n_v - m_v}{n_v}\right)^{\varepsilon_v} = \left(\prod_{v: \varepsilon_v=0} \frac{m_v}{n_v}\right) \times$

$\left(\prod_{v: \varepsilon_v=1} \left(1 - \frac{m_v}{n_v}\right)\right)$ . したがって,  $d(I) = 1$  となり,  $M$  が有限型であることが知られる.

Lemma 3.  $v=1, 2, \dots$  に對して,  $I(v)$  の部分集合  $I'(v)$  で,

$$\sum_{\nu} \sum_{j \in I(\nu)} \lambda_{\nu j} < \infty$$

$\varepsilon$  満たすもの  $\varepsilon$  考えた。  $I'(\nu) = I(\nu)$  かつ  $\nu$  は有限個しかあるから、それらは考慮外として、

$$J(\nu) = I(\nu) - I'(\nu) \neq \emptyset$$

とした。  $j \in J(\nu)$  に対して、

$$\lambda'_{\nu j} = \lambda_{\nu j} / \sum_{k \in J(\nu)} \lambda_{\nu k}, \quad e'_{\nu} = \sum_{j \in J(\nu)} \lambda'_{\nu j}{}^{1/2} \phi_{\nu j} \otimes \phi_{\nu j}$$

とすれば、

$$H = \prod_{\nu} \otimes (H_{\nu}, e_{\nu}) = \prod_{\nu} \otimes (H_{\nu}, e'_{\nu}).$$

故に、 $M$  はこの  $\delta$  の基準ベクトルの変更によって変化したものが、さらに、定理の  $\lambda_{\nu j}$  が満たすおのれの条件 (3), (4), (5) による。

証明. 無限テンソル積が一収束するための条件は、

$\sum_{\nu} (1 - (e_{\nu}, e'_{\nu}))$  が収束することであるが、この場合、

$$\begin{aligned} \sum_{\nu} (1 - (e_{\nu}, e'_{\nu})) &= \sum_{\nu} \left( 1 - \sum_{j \in J(\nu)} \lambda_{\nu j}^{1/2} \lambda'_{\nu j}{}^{1/2} \right) = \sum_{\nu} \left( 1 - \left( \sum_{j \in J(\nu)} \lambda_{\nu j} \right)^{1/2} \right) \\ &\leq \sum_{\nu} \left( 1 - \sum_{j \in J(\nu)} \lambda_{\nu j} \right) = \sum_{\nu} \sum_{j \in I(\nu)} \lambda_{\nu j} < \infty. \end{aligned}$$

(3), (4), (5) が変化したものとして、後に用いたのは、

III 型条件の  $\varepsilon$  だけであるから、その場合  $\varepsilon$  述べた十分大

の  $\nu$  に対して、 $\sum_{j \in J(\nu)} \lambda_{\nu j} \geq 1/2$  であるから、このとき、

$$\lambda_{\nu j} \lambda_{\nu k} \leq \lambda'_{\nu j} \lambda'_{\nu k} \leq 4 \lambda_{\nu j} \lambda_{\nu k} \quad (j, k \in J(\nu)).$$

よって、

$$\sum_{\nu} \sum_{j, k} \lambda_{\nu j} \lambda_{\nu k} \min \left\{ \left| \frac{\lambda_{\nu j}}{\lambda_{\nu k}} - 1 \right|^2, \varepsilon \right\} \leq \sum_{\nu} \sum_{j, k \in J(\nu)} \lambda'_{\nu j} \lambda'_{\nu k} \min \left\{ \left| \frac{\lambda'_{\nu j}}{\lambda'_{\nu k}} - 1 \right|^2, \varepsilon \right\}$$

$$+ 2c \sum_v \sum_{j \in I(v)} \lambda_{vj} + c \sum_v \left( \sum_{j \in I(v)} \lambda_{vj} \right)^2,$$

より、

$$\sum_v \sum_{j, k \in J(v)} \lambda'_{vj} \lambda'_{vk} \min \left\{ \left| \frac{\lambda'_{vj}}{\lambda'_{vk}} - 1 \right|^2, c \right\} \leq 4 \sum_v \sum_{j, k} \lambda_{vj} \lambda_{vk} \min \left\{ \left| \frac{\lambda_{vj}}{\lambda_{vk}} - 1 \right|^2, c \right\}.$$

したがって、 $\lambda_{vj}$  によって述べた (5) の条件と、 $\lambda'_{vj}$  によって述べた (5) の条件は同等。

さて、Lemma 1, 2 と、von Neumann の定理 (von Neumann [8]) により、 $M$  の  $\Gamma_p$   $\Gamma_q$  - 型の分類は、 $\Omega$  上の測度に関する 2 次の  $\sigma$ -可測問題となる。

I 型 :  $\mu$  は本質的には (測度 0 の部分を除いて) discrete 測度である。

II 型 :  $\Omega$  上の non-discrete 有限測度  $\rho$  と、 $G$  不変かつ  $\mu$  と同等なものが存在し、かつ、 $\sum_v \left( 1 - \frac{m_v}{n_v} \right) < \infty$ 。

III 型 :  $\Omega$  上の  $\sigma$  有限測度  $\rho$  と、 $G$  不変かつ  $\mu$  と同等なものが存在しない。

さて、 $\Omega$  上の測度の性質を調べよう。

Lemma 4.  $\Omega$  上の  $\sigma$  有限測度  $\rho$  が  $G$  不変であるための必要十分条件は、 $\forall v (= 1, 2, \dots)$  に対して、 $\rho = \rho_v \times \rho_v^*$  と表わされることがある。ここに、 $\rho_v$  は  $\Omega_v$  の各点に mass 1 と与えられた測度、 $\rho_v^*$  は  $\Omega_v^* = \prod_{l \neq v} \Omega_l$  上の測度で、 $G_v^* = \prod_{l \neq v} G_l$  に関して不変なもの。 (Moore [5])

証明 [⇐]  $p_v$  は  $G_v$  子変. ∴  $p$  は  $G_v$  子変.  $G$  は  $G_v$  で生成されたから,  $p$  は  $G$  子変.

[⇒]  $X \subset \Omega_v^*$  に対し,  $p_v^*(X) = p(\{\omega_j\} \times X)$  であり  
 ければよい.

以下, 簡単のため,  $N = 1, 2, \dots$  に対し,

$$\omega_N = (\omega_v; 1 \leq v \leq N), \quad \omega_N^* = (\omega_v; v > N), \quad \omega = (\omega_N, \omega_N^*)$$

$$\Omega_N = \prod_{v=1}^N \Omega_v, \quad \Omega_N^* = \prod_{v>N} \Omega_v, \quad \Omega = \Omega_N \times \Omega_N^*,$$

$$\mu_N = \prod_{v=1}^N \mu_v, \quad \mu_N^* = \prod_{v>N} \mu_v, \quad \mu = \mu_N \times \mu_N^*$$

と書く. また,  $\Omega_N, \Omega_N^*$  上の関数  $x_N(\omega_N), x_N^*(\omega_N^*)$  は,

$$\omega = (\omega_N, \omega_N^*) \text{ に対し, } x_N(\omega) = x_N(\omega_N), \quad x_N^*(\omega) = x_N^*(\omega_N^*)$$

と見做すことにし,  $\Omega$  上の関数と考へるとおこし.

このとき,  $L^2(\Omega_N, \mu_N)$  は  $L^2(\Omega, \mu)$  の閉部分空間と考へるとおこし.

Lemma 5. 直積測度の定義から,  $L^2(\Omega, \mu) = \prod_{\nu} (L^2(\Omega_\nu, \mu_\nu), 1)$

$$x_\nu \in L^2(\Omega_\nu, \mu_\nu), \quad \|x_\nu\| = 1 \quad (\nu = 1, 2, \dots) \text{ に対し, } x(\omega)$$

$$= \prod_{\nu} x_\nu(\omega_\nu) \in L^2(\Omega, \mu) \text{ であるための必要十分条件は,}$$

$$\sum_{\nu} \|1 - x_\nu\|^2 = 2 \sum_{\nu} (1 - \mathcal{R}(x_\nu, 1)) < \infty, \quad \text{かつ, } \sum_{\nu} \mathcal{I}(x_\nu, 1) \text{ が収束}$$

証明  $\lim_{N \rightarrow \infty} \prod_{v=1}^N x_v = x$ . ∴  $(x, 1) = \lim_{N \rightarrow \infty} \prod_{v=1}^N (x_v, 1)$ . 故に,

$\prod_{v=1}^{\infty} (x_v, 1)$  は収束. 逆に,  $\sum_{\nu} \mathcal{I}(x_\nu, 1)$  が収束ならば,

$$\left\| \prod_{v=1}^N x_v - \prod_{v=1}^{N'} x_v \right\|^2 = 2 \left( 1 - \mathcal{R} \prod_{v=N+1}^{N'} (x_v, 1) \right) \rightarrow 0. \quad (N < N', \quad N \rightarrow \infty)$$

$\therefore x \in L^2(\Omega, \mu)$ .  $\prod_{v=1}^{\infty} (x_v, 1)$  の収束は上にあげた条件と同値.

Lemma 6.  $\Omega$  上の直積測度  $\mu = \prod \mu_v$ ,  $\rho = \prod \rho_v$  が同等であるための必要十分条件は,  $(\mu_v(\Omega_v) = \rho_v(\Omega_v) = 1 \ (v=1, 2, \dots))$  とする.

$$(6) \quad \sum_v \left( 1 - \int_{\Omega_v} \sqrt{\frac{d\rho_v}{d\mu_v}}(\omega_v) d\mu_v(\omega_v) \right) < \infty.$$

現在の場合,  $\mu_v(\{\omega_{vj}\}) = \lambda_{vj}$ ,  $\rho_v(\{\omega_{vj}\}) = \rho_{vj}$  とし,

$$(7) \quad \sum_v \left( 1 - \sum_j (\lambda_{vj} \rho_{vj})^{1/2} \right) < \infty. \quad (\text{角谷 [4]})$$

証明 [⇐]  $x_v(\omega_v) = \frac{d\rho_v}{d\mu_v}(\omega_v)$  とすれば,  $\sqrt{x_v} \in L^2(\Omega_v, \mu_v)$ ,  $\|\sqrt{x_v}\| = 1$ . (6) は,  $\sum_v (1 - (\sqrt{x_v}, 1)) < \infty$  とする.  $\therefore$   $\sqrt{x_v}$  の

よ, Lemma 5 により,  $y = \prod \otimes \sqrt{x_v} \in L^2(\Omega, \mu)$ .  $\therefore \|y\| = 1$ ,

$y \geq 0$  (a.e.). 故に,  $d\bar{\rho}(\omega) = (y(\omega))^2 d\mu(\omega)$  は  $\Omega$  上の  $\sigma$  有限測度.  $\therefore \bar{\rho}(\Omega) = 1$ .  $\therefore$   $\Omega_N$  上の矩形集合  $X_N = \prod_{v=1}^N X_v$

に対しは,  $X = X_N \times \Omega_N^*$ ,  $X = X_{N'} \times \Omega_{N'}^*$  ( $N \leq N'$ ) とし,

$\bar{\rho}(X) = \int_X (y(\omega))^2 d\mu(\omega) = \lim_{N \leq N' \rightarrow \infty} \int_{X_N} x_{N'}(\omega_{N'}) d\mu_{N'}(\omega_{N'}) = \int_{X_N} x_N(\omega_N) d\mu_N(\omega_N)$

$= \rho_N(X_N) = \rho(X)$ .  $\therefore \bar{\rho} = \rho$ .  $\therefore \rho < \mu$ . また,

$\int_{\Omega_v} \sqrt{\frac{d\rho_v}{d\mu_v}}(\omega_v) d\mu_v(\omega_v) = \int_{\Omega_v} \sqrt{\frac{d\rho_v}{d\mu_v}}(\omega_v) \frac{d\rho_v}{d\mu_v}(\omega_v) d\mu_v(\omega_v) = \int_{\Omega_v} \sqrt{\frac{d\rho_v}{d\mu_v}}(\omega_v) d\rho_v(\omega_v)$ .

故に,  $\mu$  と  $\rho$  の役割は入れかえられる. 故に  $\rho \sim \mu$ .

[⇒] (6) の級数が発散するとき,  $\rho, \mu$  が互いに特異である

$\exists \varepsilon > 0, \exists N: \int_{\Omega_N} \sqrt{\frac{d\rho_N}{d\mu_N}}(\omega_N) d\mu_N(\omega_N) < \varepsilon$ . ( $\therefore$  仮定により,  $\prod_{v=1}^{\infty} \dots = 0$ .)

$X_N = \{\omega_N; \frac{d\rho_N}{d\mu_N}(\omega_N) \geq 1\}$  とすれば,  $\mu_N(X_N) < \varepsilon$ .  $\therefore$

$$p_N(X_N^c) = \int_{X_N^c} d\rho_N(\omega_N) = \int_{X_N^c} \frac{d\rho_N(\omega_N)}{d\mu_N(\omega_N)} d\mu_N(\omega_N) \leq \int_{X_N^c} \sqrt{\frac{d\rho_N(\omega_N)}{d\mu_N(\omega_N)}} d\mu_N(\omega_N)$$

$$< \varepsilon.$$
 故に,  $X = X_N \times \Omega_N^*$  は,  $\mu(X) < \varepsilon$ ,  $\rho(X^c) < \varepsilon$   $\varepsilon$  満足  
 下. 故に,  $\rho, \mu$  は互いに特異.

### § 2. I 型の条件.

$\omega = (\omega_{j_v}; v=1, 2, \dots)$  に対し,  $\mu(\{\omega\}) = \prod \mu_v(\{\omega_{j_v}\})$   
 $= \prod \lambda_{j_v}$ . この値が一様小さくできるのは  $j_v = 1$  ( $v=1, 2, \dots$ ) のこと.  
 したがって,  $\mu$  が本質的に discrete 正測度であるための条件は,  
 $\prod \lambda_{v1} > 0$ , かつ  $\sum (1 - \lambda_{v1}) < \infty$ .

### § 3. II<sub>1</sub> 型の条件.

$[\Rightarrow]$   $m_v$  に関する条件は trivial.  $\rho$  は  $\Omega$  上の  $G$  不変有限測度とする.  
 すべて  $v$  の  $v=1, 2, \dots$  に対し,  $m_v < \infty$  であるから,  
 $\Omega_v \times G_v$  と同一視して, 有限アベル群と見ることができ  
 る. そうすれば  $\Omega$  はコンパクト・アベル群となり,  $G$   
 はその稠密な部分群. したがって  $\rho$  が  $\Omega$  のハール測度であることが  
 知られる. (例えば,  $\rho$  のフーリエ変換を考へればよい.)  
 $\rho(\Omega) = 1$  としおいてよい.  $\rho_v(\{\omega_{j_v}\}) = 1/m_v$  ( $v=1, \dots, m_v$ )  
 正測度  $\rho_v$  は  $\Omega_v$  上に考へれば,  $\rho = \prod \rho_v$  である. 故  
 に, Lemma 6 により,  $\sum_v (1 - \sum_j (\frac{\lambda_{j_v}}{m_v})^{1/2}) = \frac{1}{2} \sum_v ((\frac{1}{m_v})^{1/2} - \lambda_{j_v}^{1/2})^2$   
 $< \infty$ . ( $\rho \sim \mu$  であるから) したがって, Lemma 2 により,  $\sum_v (1 - \frac{m_v}{n_v})$

$$\begin{aligned}
&< \infty. \quad \therefore \left( \sum_{\nu} \sum_{j=1}^{n_{\nu}} \left( \left( \frac{1}{n_{\nu}} \right)^{1/2} - \lambda_{\nu j}^{1/2} \right)^2 \right)^{1/2} \leq \left( \sum_{\nu} \sum_{j=1}^{m_{\nu}} \left( \left( \frac{1}{m_{\nu}} \right)^{1/2} - \lambda_{\nu j}^{1/2} \right)^2 \right)^{1/2} \\
&+ \left( \sum_{\nu} \sum_{j=1}^{n_{\nu}} \left( \left( \frac{1}{n_{\nu}} \right)^{1/2} - \left( \frac{1}{m_{\nu}} \right)^{1/2} \right)^2 + \sum_{\nu} \frac{n_{\nu} - m_{\nu}}{n_{\nu}} \right)^{1/2} \\
&\leq \left( \sum_{\nu} \sum_{j=1}^{m_{\nu}} \left( \left( \frac{1}{m_{\nu}} \right)^{1/2} - \lambda_{\nu j}^{1/2} \right)^2 \right)^{1/2} + \left( 3 \sum_{\nu} \left( 1 - \frac{m_{\nu}}{n_{\nu}} \right) \right)^{1/2} < \infty.
\end{aligned}$$

[ $\Leftarrow$ ] Lemma 6 に  $\delta = 2$ ,  $\mu$  は上  $\Sigma$  測度の  $\rho$  と同等,  $\Sigma$  は  $\infty > \sum_{\nu} \sum_{j=1}^{n_{\nu}} \left( \left( \frac{1}{n_{\nu}} \right)^{1/2} - \lambda_{\nu j} \right) \geq \sum_{\nu} \left( 1 - \frac{m_{\nu}}{n_{\nu}} \right)$ .  $\therefore \frac{m_{\nu}}{n_{\nu}} \rightarrow 1$ .  
 故に, 無限に多  $\nu$  の  $m_{\nu} > 1$ .  $\therefore \rho$  は non-discrete.  
 $\Sigma \subset \Sigma$ ,  $\rho(\Omega) = 1$ .

#### § 4. III 型の条件. [ $\Leftarrow$ ]

$M$  が半有限である,  $\tau$  とする. すれば  $\Sigma$ ,  $\Omega$  上には  $\mu$  と同等  $G$  不変測度  $\rho$  が存在し  $\tau \subset \Sigma$ ,

$$(8) \quad \sum_{\nu, j, k} \lambda_{\nu j} \lambda_{\nu k} \min \left\{ \left| \frac{\lambda_{\nu j}}{\lambda_{\nu k}} - 1 \right|^2, c \right\} < \infty$$

を示す.

Lemma 4 を繰返して用いるに  $\Sigma$  は  $\tau$  より,  $\rho = \prod_{\nu=1}^N \rho_{\nu} \times \rho_N^*$  と書くと  $\Sigma$  が  $\tau$  より  $\Sigma = \Sigma$ ,  $\rho_{\nu}$  は  $\Omega_{\nu}$  上の各点に mass 1 の  $\Sigma$  子測度,  $\rho_N^*$  は  $\Omega_N^*$  上の  $G_N^*$  子変測度である.  $\Sigma = \Sigma$ , 各  $\rho_{\nu}$  は  $\rho_{\nu}^*$  は,  $\mu_{\nu}$  は  $\rho_{\nu}^*$  と同等の測度とすれば,  $\chi(\omega) = \frac{d\rho}{d\mu}(\omega)$ ,  $\chi_{\nu}(\omega_{\nu}) = \frac{d\rho_{\nu}}{d\mu_{\nu}}(\omega_{\nu})$ ,  $\chi_N^*(\omega_N^*) = \frac{d\rho_N^*}{d\mu_N^*}(\omega_N^*)$  とある.  $\Sigma$ , 任意の実数  $t$  に対し, 関数  $\chi^t(\omega)$ ,  $\chi_{\nu}^t(\omega_{\nu})$ ,  $\chi_N^{*t}(\omega_N^*)$  は,  $\exp(2\pi i t(\cdot))$  の  $(\cdot)$  にそれぞれ  $\chi(\omega)$ ,  $\chi_{\nu}(\omega_{\nu})$ ,  $\chi_N^*(\omega_N^*)$  を代入して  $\Sigma$  上の  $\Sigma$  定義可能.  $\Sigma$  すれば,  $\chi^t(\omega) = \prod_{\nu=1}^N \chi_{\nu}^t(\omega_{\nu}) \cdot \chi_N^{*t}(\omega_N^*)$ .

これら関数は、 $\forall t \in L^2(\Omega, \mu)$  に属する単位ベクトルと見  
作ることができる。

$P_N \in L^2(\Omega)$  の  $L^2(\Omega_N)$  上への射影作用素とすれば、

$$P_N(\chi^t) = \left( \prod_{v=1}^N \chi_v^t \right) \cdot (\chi_N^{*t}, 1). \quad \text{よって, } \lim_{N \rightarrow \infty} P_N(\chi^t) = \chi^t \quad (32).$$

$$\therefore \lim_{N \rightarrow \infty} \|P_N \chi^t\| = \lim_{N \rightarrow \infty} |(\chi_N^{*t}, 1)| = 1. \quad \text{よって, } N \text{ が大きければ}$$

は、 $(\chi_v^t, 1) \neq 0$  と仮し、 $\alpha_v^t (\chi_v^t, 1) > 0$  とし  $\alpha_v^t = \exp(2\pi i t \beta_v^t)$

と定めることができる。  $\gamma_N^t = \left( \prod_{v=1}^N \alpha_v^t \right)^{-1} (\chi_N^{*t}, 1)$  とすれば、

$N$  が大きければ、 $\gamma_N^t$  は一定の偏角をもち、 $\delta^t = \overline{\gamma_N^t} / |\gamma_N^t|$  とおけば、 $\prod_{v=1}^N \alpha_v^t \chi_v^t = |\gamma_N^t|^{-1} P_N(\delta^t \chi^t) \rightarrow \delta^t \chi^t$

故に、Lemma 5 より、 $\sum_v \|1 - \alpha_v^t \chi_v^t\|^2 < \infty$ 。よって、 $\chi_v(\omega_j)$

$$= 1/\lambda_{vj} \quad \text{なり。よって、用いられる、}$$

$$\sum_v \sum_j \lambda_{vj} \left| \exp(2\pi i t (\beta_v^t - \log \lambda_{vj})) - 1 \right|^2 < \infty \quad (\forall t \in \mathbb{R})$$

が得られる。よって、

$$\begin{aligned} & \therefore \sum_{j,k} \lambda_j \lambda_k \left| \exp(2\pi i t (\log \lambda_j - \log \lambda_k)) - 1 \right|^2 \\ & \leq 2 \sum_{j,k} \lambda_j \lambda_k \left( \left| \exp(2\pi i t (\beta_j^t - \log \lambda_j)) - 1 \right|^2 + \left| \exp(2\pi i t (\beta_k^t - \log \lambda_k)) - 1 \right|^2 \right) \\ & \leq 4 \sum_{j,k} \lambda_j \lambda_k \left| \exp(2\pi i t (\beta_j^t - \log \lambda_j)) - 1 \right|^2 < \infty \end{aligned}$$

よって、 $2 \sum_v \xi_v (1 - \cos t \eta_v) = \sum_v \xi_v \left| \exp i t \eta_v - 1 \right|^2$  ( $\xi_v > 0$ ) かつ

$\eta_v$  の実数  $t$  により  $2$  収束するものは、 $\sum_v \xi_v \min\{|\eta_v|^2, c\}$

が  $c > 0$  により  $2$  収束するものは、 $c > 0$  により  $2$  収束するから

、 $\sum_{j,k} \lambda_j \lambda_k \min\{|\log \lambda_j - \log \lambda_k|^2, c\}$  は  $c > 0$  により  $2$  収束

する。よって、(8) と同値である。

詳しくは, Moore [5], 竹之内 [9].

§5. III型の場合, [⇒]

(8) が成立するとき,  $M$  が半有限であることを示す.

まず,

$$(9) \quad \exists \varepsilon > 0 : \frac{\lambda_{vj}}{\lambda_{vk}} \geq \varepsilon \quad (v=1, 2, \dots; j, k \in I(v))$$

が成立するとき場合  $\varepsilon$  を与える. このときは, (8) により

$C$  の  $\min$  を与える必要がなく,

$$\sum_{v,j,k} \lambda_{vj} \lambda_{vk} \left| \frac{\lambda_{vj}}{\lambda_{vk}} - 1 \right|^2 < \infty$$

が主張されたことに注意. いま, 2乗平均偏差に關して, 平均値のまわりのずれが最小であることを利用すれば,

$$\begin{aligned} \infty &> \sum_{v,j,k} \lambda_{vj} \lambda_{vk} \left| \frac{\lambda_{vj}}{\lambda_{vk}} - 1 \right|^2 = \sum_{vj} \lambda_{vj} \sum_{k=i}^{m_v} \lambda_{vk} \left| \frac{\lambda_{vj}}{\lambda_{vk}} - 1 \right|^2 \\ &\geq \sum_{vj} \lambda_{vj} \sum_k \lambda_{vk} \left| \frac{\lambda_{vj}}{\lambda_{vk}} - m_v \lambda_{vj} \right|^2 = \sum_{vj} \lambda_{vj} \sum_k \lambda_{vj} \frac{\lambda_{vj}}{\lambda_{vk}} |m_v \lambda_{vk} - 1|^2 \\ &\geq \varepsilon^2 \sum_{vj} \lambda_{vj} \sum_k \frac{1}{m_v} |(m_v \lambda_{vk})^{1/2} - 1|^2 \\ &= \varepsilon^2 \sum_{vj} \lambda_{vj} \left| \left(\frac{1}{m_v}\right)^{1/2} - \lambda_{vj}^{1/2} \right|^2. \end{aligned}$$

( $\because$  (9) より,  $\lambda_{vj} \geq \varepsilon/m_v$  が得られることを用いた.)

故に, II型条件から, Lemma 2 の  $(M)_\varepsilon$ , (したがって  $M$  が半有限  $\mathcal{P}$   $\mathcal{P}$   $\mathcal{P}$  - であることを知られた.)

よって, 一般の場合に, (9) が成立するに問題を变形できる.

まず, §4 の最後の数行から, (8) と,

$$\sum_{j,k} \lambda_{vj} \lambda_{vk} \left| \exp(2\pi i t (\log \lambda_{vj} - \log \lambda_{vk})) - 1 \right|^2 < \infty \quad (\forall t \in \mathbb{R})$$

の同値であることは容易である。  $\xi = \tau$ ,

$$\varphi_v^t = |\varphi_v^t| \exp(-2\pi i \beta_v^t) = \sum_R \lambda_{vk} \exp(-2\pi i t \log \lambda_{vk})$$

と  $\delta' < \varepsilon$ , であるから,

$$(10) \quad \sum_{vj} \lambda_{vj} \left| \exp(2\pi i t (\beta_v^t - \log \lambda_{vj})) - 1 \right|^2 < \infty \quad (\forall t \in \mathbb{R})$$

が導かれる。

$\varepsilon = \tau$ ,  $t = 1/3$  とし  $\tau$ , である  $t$  に対し,

$$I'(v) = \left\{ j; \left| \exp(2\pi i t (\beta_v^t - \log \lambda_{vj})) - 1 \right| \geq \frac{1}{2} \right\}$$

と  $\tau/3$  であるから, (10) から,

$$\sum_v \sum_{j \in I'(v)} \lambda_{vj} < \infty.$$

したがって, Lemma 3 を用いて,  $I'(v)$  に属するものは除いて

して,

$$\left| \exp(2\pi i t (\beta_v^t - \log \lambda_{vj})) - 1 \right| < \frac{1}{2} \quad (v=1, 2, \dots; j \in I(v))$$

が成立する。したがって  $\varepsilon$  (  $\varepsilon \delta' < \varepsilon$  ) を与える。このとき,

$$\left| \exp(2\pi i t (\log \lambda_{vj} - \log \lambda_{vk})) - 1 \right| < 1$$

であるから, 適当な整数  $n_{jk}$  に対し,

$$\left| 2\pi t (\log \lambda_{vj} - \log \lambda_{vk}) - 2n_{jk}\pi \right| < \frac{\pi}{3}$$

が成立する。  $t = 1/3$  とし  $\tau$  を与える。したがって,

$$\left| (\log \lambda_{vj} - \log \lambda_{vk}) - 3n_{jk} \right| < \frac{1}{2}.$$

であるから,  $\{\lambda_{vj}; j \in I(v)\}$  は  $\tau$  を除く組  $\{\lambda_{vj}; j \in I(v, p)\}$

(  $p=1, \dots, l(v)$  ) に類別される,

(11) 同じ組の中では  $|\log \lambda_j - \log \lambda_k| < 1$ ,

違う組の間では  $|\log \lambda_j - \log \lambda_k| > 1$

が成立することに付き、 $\Sigma$  の組の中で、有限個の  $\nu$  を除くとき、

$$\sum_{j \in I(\nu, p_\nu)} \lambda_j \geq \frac{1}{3}$$

を満たす  $p_\nu$  が存在することは (8) を用いて知られる。この

$I(\nu, p_\nu)$  を考えれば、やはり (8) を用いて、

$$\sum_{\nu} \sum_{j \in I(\nu, p_\nu)} \lambda_j < \infty.$$

したがって、Lemma 3 に従って、 $\{\lambda_j; j \in I(\nu, p_\nu)\}$  を考え

ればよいことに付き、このときは、(11) に従って (9) が成

立っていることに付き、既に示したことは従って、

$M$  は半有限である。

詳細は、付之内 [9]。

#### References

- [1] H. Araki: A lattice of von Neumann algebras associated with the quantum theory of a free Bose field, Journal of Math. and Phys., Vol. 4 (1963), pp. 1343-1362.
- [2] H. Araki and E. J. Woods: A classification of factors, To appear.
- [3] D. J. C Bures: Certain factors constructed as infinite tensor products, Comp. Math., Vol. 15 (1963), pp. 169-191.

- [4] S. Kakutani: On equivalence of infinite product measures, Ann. Math., Vol. 49 (1948), pp. 214-224.
- [5] C. C. Moore: Invariant measures on product spaces, Proc. of the Fifth Berkeley Symposium, 1967. Vol. II, Part 2, pp. 447-459.
- [6] L. Pukánsky: Some examples of factors, Publ. Math. Debrecen, Vol. 4 (1956), pp. 135-156.
- [7] J. von Neumann: On infinite direct products, Collected Papers, Vol. 3, pp. 323-399.
- [8] J. von Neumann: On rings of operators III, Collected Papers, Vol. 3, pp. 161-228.
- [9] O. Takenouchi: On type classification of factors constructed as infinite direct products, To appear.